

## チーム医療における診療放射線技師の役割

～ チーム医療を推進するための課題とは～

佐野 幹夫

公益社団法人日本診療放射線技師会 副会長



チーム医療とは、医療の高度化や複雑化に伴う業務の増大により医療現場の疲弊が指摘される中、医療に従事する多種多様な専門職種が、各々の高い専門性を生かし、目的と情報を共有し、業務を分担しつつ互いに連携・補完し合い、患者へ安全な医療を提供するための協働医療が基軸となる。

また医療社会や患者のニーズが多様化するとともに患者のQOLを重視する傾向にあり、専門職種としての知識・技術の向上のみならず、いかに患者の肉体・精神の両面を継続的に、そして総合的にケアできる体制が整えられるかが求められている。まさに超高齢社会を迎え病気の診断・治療から予防医学へ、治癒の技術からQOLの技術へと医療は急速に変化しつつある。そして放射線診療における画像診断と治療に携わる専門職種として「患者への侵襲を少なくかつ正確で的確な情報を提供する」ことが重要である。

近年、医療のIT化が進み、多くの医療施設がカルテの電子化とともにPACSの導入に伴い、医療画像の一元管理を可能にして臨床現場の業務内容は一変した。とくに放射線部門の業務は、放射線装置のデジタル化とともに技術革新が起り、高度医療機器の発展につながった。それは新たに画像情報の専門職種として、院内に展開する画像管理や最先端の検査技術が続々と生み出され、医療現場ではその対応に「画像構築において3Dや手術支援などのナビゲーション」など、新たな業務も展開されてきた。

そして平成22年の「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」とした厚生労働省医政局通知では、診療放射線技師の積極的な活用として「画像診断における読影の補助を行うこと」「放射線検査等に関する説明・相談を行うこと」が役割として明記されており、医療安全の観点からも、我々が日々の業務において当たり前で役割と認識するべきである。

しかしながら、多くの医療機関で十分に展開されていない現実がある。現状の日本の医療体制では多くの医療系専門職種は医師の具体的な指示により業務を遂行しており、このことは、医師を頂点としたヒエラルキー的な構造を存在させ、チーム医療体制が推進しない背景がある。相互の理解、すなわち医師が専門職種との協働意識を持つことで互いの専門性への信頼が生まれ、真のチーム医療の推進につながると確信している。

またその後「チーム医療推進会議」において、各専門職種の現状の業務範囲の見直しから診療放射線技師の業務拡大へつながった。「医療現場で抜針・止血等、現行の診療放射線技師の業務範囲に含まれていない行為が相当程度に実際に行われている」として、造影剤の血管内投与など数項目が認められた。業務拡大に伴うJART主催の統一講習会は全ての診療放射線技師を対象に行っている。他職種と連携しチーム医療を実現することが、医療安全の観点からも医療社会から求められている。そして医師の負担軽減からも医療スタッフ間の協働範囲の拡大も視野に入れたチーム医療の推進が求められている。

そんな中、診療放射線技師のチーム医療における役割は、他の専門職種と異なりX線を人体に照射する業務行為に対し、医師以外の業務独占であるが故に、専門性の高い職種としてチーム医療への参画の間口が狭いと感じている。しかし、日々の検査業務において医師や看護師など、さまざまな医療スタッフと協働で行う検査業務が多いのも実情である。その際、最適な検査や治療を行うにはスタッフ間のコミュニケーションは重要であろう。そして診療放射線技師による医療被ばく管理は専門職種としての責務である。特に血管撮影検査やX線TV検査など、患者はもとより医療従事者への監視は必要不可欠である。

今後、医療現場に人工知能(AI)が導入され、専門職種の業務も変化するだろう。しかし、どのように変化しても医師や他の専門職種との相互理解と連携が必要不可欠であり、チーム医療において良質な医療と医療安全を前提にその結果が「患者の利益」に反映されることがもっとも重要である。